血栓性血小板減少性紫斑病（TTP）

英語名：Thrombotic Thrombocytopenic purpura

Ａ．患者の皆様へ

ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

血液の凝固に重要な役割をはたしている血小板が全身の血管の中で凝集し、血栓ができる「血栓性血小板減少性紫斑病」は、医薬品によって引き起こされる場合もあります。

お薬を服用していて、次のような症状がみられた場合には、放置せずに、ただちに医師・薬剤師に連絡してください。

「発熱」、「倦怠感」、「脱力感」、「悪心」、「食欲不振」、「あおあざができる」、「鼻や歯ぐきからの出血」、「尿量の減少」、「皮膚や白目が黄色くなる」、「軽度の頭痛、めまい、けいれん、突然自分のいる場所や名前がわからなくなる、うとうとするなどの症状が短時間におこる」などの症状

１．血栓性血小板減少性紫斑病とは？

止血に必要な細胞である血小板が不適切に活性化され、血小板が互いにくっつきあって小さい塊を形成します。そのことにより血小板の数が減少し、また塊が血栓として血管を閉鎖することによって支配領域に虚血性変化を引き起こし種々の多彩な症状を示す疾患です。

発熱、倦怠感、脱力感、悪心、食欲不振など不定な症状で始まり、その後、紫斑（あおあざ）ができたり、口腔などの粘膜から出血したり、あるいは短時間に見られるけいれん、意識障害、傾眠傾向、錯乱などの神経症状、黄疸、尿量の減少などの症状が急激に出現します。

２．早期発見と早期対応のポイント

お薬を飲み始めてから少なくとも１ヶ月の間は自覚症状に注意し、発熱、倦怠感、食欲不振などの不定愁訴に加え、皮膚、粘膜の紫斑を始めとする出血傾向、変動する精神神経症状、尿量減少、黄疸などの症状が出た場合は、速やかに主治医へ連絡してください。

※　医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの、「添付文書情報」から検索することができます。
（http://www.info.pmda.go.jp/）
また、薬の副作用により被害を受けた方への救済制度については、独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページの「健康被害救済制度」に掲載されています。
（http://www.pmda.go.jp/index.html）